

「ラフマニノフ作曲 プレリユード Op. 23-5」のピアノ研究演奏

— 音楽表現の考察 —

的場 里美

キーワード：ラフマニノフ、プレリユード、ピアノ演奏、音楽表現

はじめに

全国大学音楽教育学会関西地区学会 平成30年度前期研究会（平成30年7月8日 於：大阪市立総合生涯学習センター主催：全国大学音楽教育学会関西地区学会）において、研究演奏発表を行った。ロシアの作曲家ラフマニノフ（Sergei Vasil'evich Rachmaninov 1873-1943）が1901年～1903年に作曲したプレリユード Op.23-5をピアノソロ演奏で発表した^{ix}。

研究発表要旨

ラフマニノフのプレリユードの中でも良く知られたこの曲は、行進曲風に始まり、中間部はレガートで情緒溢れる美しいメロディーを歌い、再現部ではまた行進曲のリズムが現れる。

またト短調の調性はシューベルトの魔王、アルビノーニのアダージョ、ショパンのバラード第1番にも使われており、高揚感やロマン的な感傷、真剣な思い等を効果的に表現する調である。日頃、学生の指導においても、読譜の前にまず調性の持つ意味や雰囲気を感じ、レガートで歌い、リズムをとらえた上で、身体で覚えてから音楽を表現する意識を大切にしたいと思い、本曲を研究演奏曲として選択した。

音楽とは本来人生・生活等で感じた感情や自然界の音等を音や間で表現された芸術である。学生たちが音楽を心と身体で感じながら演奏するにはどのような過程を経れば理想的なのか、音楽経験も一人一人が違い、個性も様々な学生たちがどのような手順で練習を積み重ねて行けばいいのかを研究演奏者自身の練習過程を通じて考察してみた。

学生たちは新しい楽譜を目にしたとき、小さい頃聴いたり歌ったことがある童謡やメロディーは馴染みやすいが、読譜力がついていない学生は音符を理解しそれを音にして弾くことに精一杯で、ただ音を並べるだけの演奏になってしまう。その場合指導者は、手の形や呼吸さらに身体の使い方等を示しながら指導する。反対に、楽譜を見ずに耳で音をコピーして弾いてしまう学生もいるため、指導者はそれらをバランス良く、曲を仕上げていく事ができるよう配慮する。

一方、経験を積んだ演奏者も音符が非常に多く複雑な楽曲になると、一音一音読譜しながら音色やハーモニー（重なる音の響き）を作っていく。ラフマニノフの楽曲は音符の数が非常に多く、音域も広く、手の移動が多く、いわば音の洪水である。ラフマニノフのト短調のプレリ

ュードは、約5分の楽曲であるが、行進曲のようなリズムで始まり、中間部は非常に抒情的で甘美なメロディーが3声部に同時に進行し、それを左右の手で美しく歌わせなければならない非常に難しい楽曲である。それを仕上げる過程において、研究演奏者は

- ・いつもそれぞれのメロディーを心の中で歌う
- ・フレーズを意識し、フレーズの最後は話し言葉と同じようにディミュニエンドで終止し、次のフレーズに入る前に呼吸をする
- ・身体の中で行進曲（マーチ）のリズム感やカンタービレ（歌う）をいつも感じるようにする

等を意識しながら練習を重ねて仕上げていった。

経験の浅い学生もこのように意識しながら練習を続けていくと、ただ音を並べるだけではなく音楽的に表現でき、たとえ指がついていかない部分があっても、心の中にいつも音楽が鳴り響いていれば、その部分をなんとか乗り越えられて自分なりの音楽的な表現ができるようになると研究演奏者は確信している。

<注>

^{ix} 全国大学音楽教育学会関西地区学会 平成30年度前期研究会 プログラム、P.1、Ⅲ.2. ピアノ独奏 的場里美（夙川学院短期大学）ラフマニノフ作曲：「プレリュード」ト短調 作品23より第5番。